

炭鉱労働者の空間認識

川 松 あかり

0 はじめに

本稿は、2024年1月21日に行われた台日共同フォーラム「東アジアにおける炭鉱文化ルートとその社会的意義」の第2部「石炭産業から何を学ぶか—学術研究の可能性と産業遺産の社会的意義を考える」、パネル1「炭鉱の労働・暮らし・地域」における拙報告、「炭鉱労働者の空間認識」に基づくものである。本フォーラムの狙いは、依拠する学問領域を異にする研究者同士が、「炭鉱」という「世界共通言語」を通して学び合いを深めることであった。そこで、本報告では初めに筆者の専門とする文化人類学や民俗学の調査方法の特徴を紹介し、調査地福岡県筑豊の概要と筆者によるこれまでの研究の限界を提示する。そのうえで、これまでの調査で得られた元坑内労働者の炭鉱をめぐる語りと表現を事例として示しながら、現在取り組もうとしている研究課題とその展望について論じる。本報告を通して、現在の旧産炭地筑豊でのエスノグラフィックな調査が直面した問いとして、炭鉱を直接知らない者が元炭鉱労働者の坑内経験を伝える表現をいかに理解することができるのかという課題に取り組むことのアクチュアリティを、改めて共有したいと考える。

1 研究の方法—現代の旧産炭地筑豊におけるエスノグラフィ

筆者は文化人類学および民俗学を専門としており、調査の中心をなすのは調査地に住み込んで行われる参与観察的なフィールドワークと、フィールドワークの文脈に埋め込まれたインタビュー／聞き書きである⁽¹⁾。入門的な説明では、エスノグラファーはこのようなフィールドワークによって、現地の人びとの内在的な視点や世界観を獲得することを目指す⁽²⁾とされる。筆者の場合、2014年頃から福岡県の旧産炭地筑豊をフィールドとして調査を行うようになった。本格的なフィールドワークは、2016年度に1年間筑豊の元炭鉱労働者一家の自宅に住まわせてもらって実施した。その後も、数日から数週間の期間での訪問を繰り返した。2022年度からは同じ福岡県内に居住するようになったため、調査目的に限らずより多様な形式でこの地域や住民と関係を持つようになっている。

上記のようにその時々で地域との距離感を変化させながら展開してきた筆者の「調査」は、悪く言えば計画性に乏しい成り行き任せのものである。人類学や民俗学においては、1980年代以降盛んにおこなわれた「文化を書く」[クリフォード・マークス 1996]という言葉に象徴される議論を経て、フィールドワークから得られる知見は、その調査者が現地の人びとと出会い、対話を図る過程で引き出された再現不可能なものであるということが、強く意識されるようになっている。かといって、一調査者が主観的・個人的に直面する問題が、調査地におけるより普遍的・集合的な問題と何らの関係もないということもないだろう。筆者の抱く問題意識も、結局は筑豊を取り巻く歴史的過程と文脈のなかで生み出されたものであり、筆者がフィールドワークを通して出会った人々とのかわりあいのなかから我が問題として形を成してきたものに過ぎない。たとえそれが無数のリアリティの中の「部分的真実」[クリフォード・マークス 1996]に過ぎなかったとしても、その問いの形成過程をきちんと跡付けることには意義があるはずである。そこで、次節からは旧産炭地筑豊の概略を示

(1) エスノグラフィックな実践に埋め込まれたものとしてインタビューを捉えるという視点については、民俗学者のブリギッタ・シュミット＝ラウバーの議論 [Schmidt-Lauber 2012: 567-568] を参照。Schmidt-Lauber は、エスノグラフィック・インタビューの特徴として再帰性・開放性・プロセス性を挙げている。

(2) 例えば、人類学における長期的フィールドワークという調査方法を確立させたとされる『西大西洋の遠洋航海者』で、著者のプロニスワフ・マリノフスキは、「彼の世界についての彼の見方を理解すること」が民族誌学者の最後の目標であると述べている [マリノフスキ 2010: 65]。

しながら、筆者がこれまでの調査で直面した限界を示したうえで、そこからさらに見出され得る現在の研究課題について論じていく。

2 (旧) 産炭地筑豊の概要と、本研究の課題

筑豊炭田は、九州北部・福岡県に位置する。明治時代には日本の全出炭量の半分以上を賄っていた時期もある、日本の主要炭田の一つである。日本の他の産炭地と比較した筑豊の特徴は、財閥系資本、地場大手資本、中小零細炭鉱が、狭い範囲にひしめき合っていた点にあるという〔福岡県田川市総務部総合政策課編 2010:4、高橋 1962:24-27〕。「狭い」とはいえ、その範囲は筑豊炭田のほぼ中央を南北に貫く遠賀川の起点から海口まで約 56.7km、東西 12~28km の約 787km² の面積を占め〔田川市立図書館 online〕、今日の行政区分でも筑豊と位置付けられる 5 市 3 郡に加え、北九州の中間市・水巻町・遠賀町・芦屋町・岡垣町・そして北九州市の一部までをもその領域に含んでいる。このなかに最盛期には 200 以上もの大中小様々な炭鉱があったと言われる。

明治期以降近代化の主要エネルギー資源産出地として急激に発展した筑豊地域であったが、上述のように大炭鉱と中小零細炭鉱によって複雑な鉱区構成が形成され、優良鉱区を独占した大炭鉱はそれほど機械化等によって生産性を上げなくても利益を得られたために、他の産炭地に比べて合理化が遅れたことが指摘されている〔高橋 1962:24-27〕。戦後、炭鉱町は石炭優遇政策により、空襲等によって職を失ったり外地から引き揚げたりした人々を多く吸収しながら発展した。しかし、GHQ のエネルギー政策が転換されると、1950 年代初頭の朝鮮戦争による好景気を最後に小炭鉱は深刻な不況に陥った。1955 年の石炭鉱業合理化臨時措置法制定により、いわゆるスクラップ・アンド・ビルド政策が開始されると、合理化の遅れていた筑豊では専らスクラップが進行し、小炭鉱から順に閉山していく結果となった。エネルギー政策の転換過程で、特に 1960 年前後には筑豊の炭鉱地帯の失業や貧困が全国的に注目された。そして、1976 年、地場大手貝島炭鉱の露天掘りの終了をもって全ての炭鉱が閉山となった。

石炭産業の斜陽期には、各地から支援者や社会活動家が集まった。こうした社会運動は、一部の地域住民の生き方に大きな影響を与えた。一方、この時期筑豊を目指した人々にとっても、筑豊で受けた影響は大きかった。活動家の中には筑豊に移住して、閉山後の地域づくりに身を投じた人もいたのである。人類学者の Matthew Allen は、1980 年代末に筑豊で行った調査に基づくエスノグラフィにおいて、このような人々のうち、閉山後の筑豊において、公的な歴史物語では語られることのない炭鉱の暴力などを直視し、企業中心のストーリーではなく暴力の歴史を生き抜いた人間の物語を復活させようとする人々を、「筑豊リバイバリスト」と呼んだ。そして、これら主流の言説に抗う筑豊リバイバリストを、抑圧された歴史をよみがえらせるストーリーテラーとして強調した〔Allen 1994〕。

筆者が初めて筑豊に行った 2013 年には、Allen が筑豊にいた時からさらに状況に展開が起きていた。2000 年代後半以降、産業遺産としてより広く新しい視点から炭鉱の見直しが進められていたのである。このような時代背景のなか、筆者自身はどちらかという炭鉱閉山期以来の社会運動の流れを汲んだ人々の活動や思想の意義を多く論じてきた〔例えば、川松 2019、2021〕。彼／彼女らは、負の存在とされ忘れられようとしていた炭鉱労働者たちの生きざまに、むしろ炭鉱外の者や現代人が学ぶべきものを見出し、炭鉱労働者たちの生きざまを鏡として自らの生き方を問い直しながら、より良い社会を築こうとしてきたのである。

ただ、これらの活動や思想から学ぶことがどれほど多くても、依然としてたどり着くことができないのが、実際に炭鉱で働いた人々自身の内在的な世界観であった。特に、Allen のいうところの筑豊リバイバリストにあたる人々の思想が、炭鉱労働は死と隣り合わせの危険な労働だからこそ、炭鉱町では多様な人々が共に助け合い連帯してきたのだ、という認識に基礎づけられていることは、悩ましいことだった。

というのも、筆者はフィールドワークの過程で対面することになった実際の元坑内労働者から、こうした語り口への明確な反論を耳にしていたからである。例えば、大手・日炭高松炭鉱の採炭夫だった A 氏は、繰り返し「死と隣り合わせとか、坑内下がったらそんなことは絶対考えん!」、「これだけは言いたい」と強調した。鞍手町の中小炭鉱で働いた元坑内労働者 B 氏も、目の前で同僚が亡くなるのを見ても「それが我が身に降り

かかるとは思われん。俺は死なないと思っていたし、死とか考えたこともなった」と話した。

一方で、A氏もB氏も、こう言うそばから、決まって自身が直面した個別具体的な事故や坑内の危険についても話した。A氏は、先に引用した通り「死と隣り合わせとか絶対考えん」と言いつつも、実際落盤事故が起きた時は「これは怖かった、それこそ人を押し倒して逃げたもん」と仲間を踏み倒して逃げた様子を、おかしように笑いながら話した。B氏は、友達が目の前で死んだ事故について、「たった2、3分前に、ね、わしと世間話しよった人間が、目の前でぶっ飛ばされてから、壁にぶつけられて。ああもそうもないよねえ」と言い、それでも翌日には恐ろしいとかは「なーんも」「ここ（頭）にないわけ。仕事と思うちょるから」と語った。さらにB氏は仲間の死に対して一方では自分も同僚も、「今日は人の身明日は我が身」と思っていたとも述べた。また、落盤事故に遭って生き埋めになったこともあると言い、その時の言葉にならない苦しさについても語ってくれた。

A氏とB氏は、自分は毎日死の危険性を覚悟しながら坑内に入ったわけではない、むしろ死ぬかもしれないなどとは考えもしなかったとはっきりと話す。しかし、他方では死の危険を感じるほどの事故に直面したことも実際にあり、そのような経験は炭鉱労働者として働いた日々の中でも特筆すべき出来事として、他者に語るに値する重要な経験譚になっているということが指摘できよう。

3 現在の課題と問い—坑内労働者の空間認識

先行研究でも、炭鉱をめぐる語りが典型化・平板化されてきたことが指摘され〔井上2010a、2010b、清水2022〕、これを乗り越えて多様な炭鉱をめぐる経験を具体的に明らかにしようとする研究や〔井上2010a、2010b〕、対象を限定することで坑内労働空間やその仕事のありようのディテールを豊かに描き出す研究〔清水2022〕も行われてきた。

ただ、井上〔2010b：216〕も注において補足しているように、典型的で平板化された語りが重要でないというわけではない。前節に紹介したような元坑内労働者の話を繰り返し聴くほどに、筆者には筑豊で炭鉱をめぐって語り継がれている典型的で平板な語りの「型」⁽³⁾は決して間違いではないということも実感させられた。筆者自身の反省を込めて言えば、問題は、ケガや死亡のリスクの高い現場で働いた坑内労働者の日常性をいかに個別具体的な経験と語りに即して理解していくことができるか、という点にあるのではないだろうか。一言でまとめれば平板化してしまう坑内労働者の労働現場における認識の在り方について、どのような深度をもって解釈し直せば、体験のない私たちにとって生きた知として、元炭鉱労働者たちの語りを受け取り語り継ぐことができるのだろうか。これを模索することで、炭鉱の歴史を語り継ぐという課題から当面逃れられないであろう筑豊地域の人々の語りと、実際に炭鉱で働いた人たちのその労働に対する記憶の語りの間にあるずれを、少しでも埋める説明が可能になるのではないか。かつて筆者に炭鉱労働について語ってくださった人々の多くと面会することが叶わなくなりつつある現在、これまでに聞いてきた語りを改めて整理し直し、以上の問題に取り組むことが、現在の筆者の課題となっている。未だ納得のいく分析はできていないものの、以下では現在分析を試みている事例の断片を紹介することで、今後の展望を見出してみたい。

4 事例紹介

4-1 坑内労働者による図と模型

本研究において分析対象とするのは、筆者がこれまでに話を聞いた、第二次世界大戦後から炭鉱閉山期の筑豊の大手および中規模炭鉱の坑内労働者の語りである。彼らが自身の労働現場をどのように認識・イメージし、語り伝えようとしているのかを明らかにすることを目的とする。分析に際しては、語られた言葉と共に、元坑内労働者が用いた視覚的な表現に着目する。なぜなら、インタビューの際、こちらが何か質問する前から、坑道の仕組みについて、図式や模型を用いて説明してくれる元坑内労働者が多かったからだ。図1・2はその図

(3) ここでの語りの「型」という表現は、民俗学的な口承文芸研究の現代的な展開を踏まえて提示された、ドイツ民俗学者アルブレヒト・レーマンの「語りの型（マスター）」という概念に依拠している〔レーマン2020：53-59〕

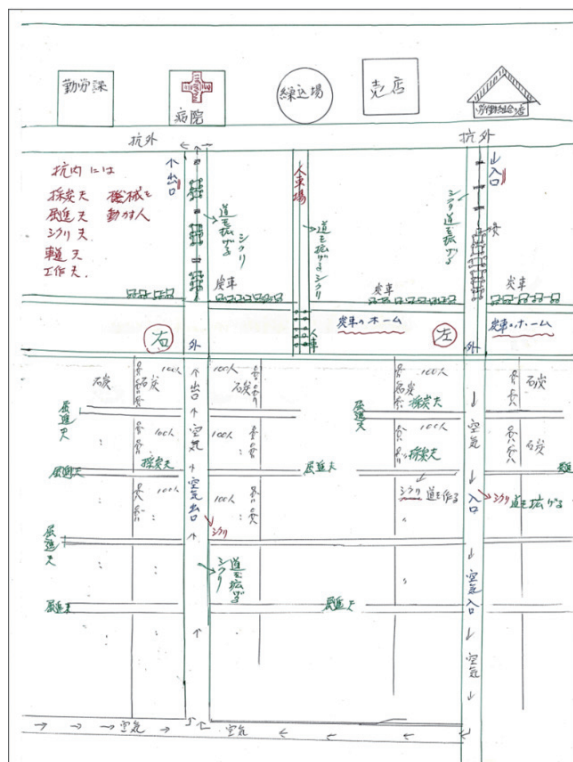


図1 大正中鶴炭鉱仕繰り夫C氏が用意してくれた図

の一例である。図1を描いたC氏（1932生）は、戦後しばらくしてから、地場大手の大正中鶴炭鉱で仕繰り夫として働いたと語る人物である。図2を描いたD氏（1937生）は、大手・三井山野炭鉱で1958年から約4年間掘進夫を務めたという人物である。また、特筆すべき事

例として、大手・三菱新入炭鉱の採炭機械・棹取りを経て残務整理にも関わった栗田徳氏の模型がある。「炭坑の仕組み語り部」を名乗る栗田氏は、何年にもわたり自前の模型を制作し続けており、それをどんどん改良して新たな模型も制作することで、坑内の様々な箇所の様子がよく理解できるよう工夫を重ねている（図3）。

分析に際して留意したいのは、(1) いずれの元坑内労働者にも、事前に筆者の研究目的が詳細に伝えられていたわけではないにもかかわらず、筆者が聞き書きに訪れた際、事前にこれらの図を用意しておいてくれた点、そして、(2) 後から坑内断面図等を見た影響があることは想定されるものの、筆者がこれまで聞き書きをした元鉱員の複数から、自分たちには事前に座学の機会はなく、就職後いきなり現場で働き始めたという点である。特に、筆者の知る限り図1・2の作者であるC氏とD氏は、図3の模型を制作した栗田氏と異なって後に公的な場で炭鉱を語り伝える役割を担ってきたような人物でもなかった。それにもかかわらず、両者の図は地上と坑内を断面図で表現するという点において大枠において同じ構図で描かれている。そしてそれは、彼らが労働中に見ていた景色とは異なる俯瞰的なものである。こうした視覚的表現から、坑内労働者が共有していた坑内労働空間に対する認識のあり方を明らかにし得るのではないかと考えている。

一方、それぞれの図のディテールに目を向けると、そこには各人の個別具体的な経験が描き込まれている。このように、元坑内労働者自身の図や模型を取っ掛かりとしてその労働経験の語りを分析することで、坑内労働に不可欠であったに違いない彼らの坑内労働空間に対する認識と、個別具体的な生活史経験を一体のものとして理解することが可能になると考える。

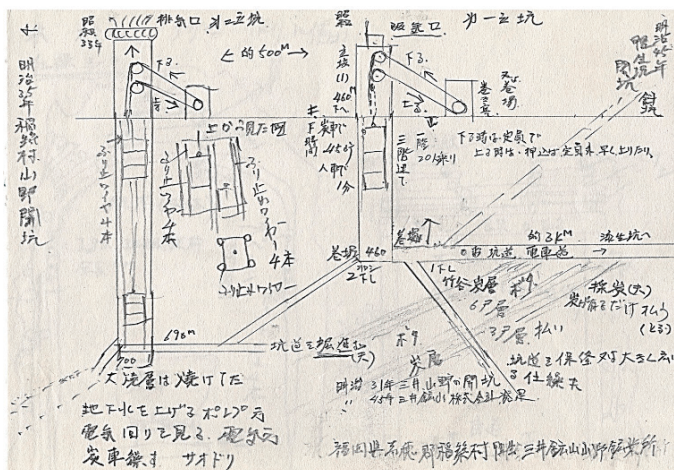


図2 三井山野炭鉱掘進夫D氏が用意してくれた図

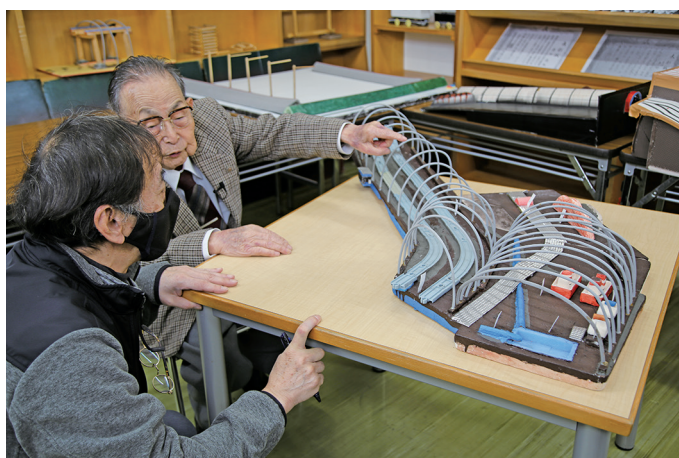


図3 栗田徳氏の坑内模型の1つ〔鞍手町歴史民俗博物館 2024：6、鞍手町歴史民俗博物館提供〕

4-2 語りと図面の分析―「入気」と「排気」をめぐって

分析の第一歩となる一事例として、元坑内労働者の方々の語りから炭鉱を理解する基礎事項であることがうかがえた「入気」と「排気」に関わる語りを取り上げたい。というのも、前節で挙げたような俯瞰的な図を描きながら、元坑内労働者の方々が決まって初対面の筆者に入気坑道と排気坑道について教えてくれたことも、興味深い一致だったからである。その個別の語りからは、「入気」「排気」は坑内における身体感覚と結びつきながら、坑道全体のイメージを持つのに重要だったことがうかがえる。

まず、筑豊の明治炭業所で働いた笹尾了祐による『思い出の炭鉱ことば』の「排気坑道」の項目を引用して、「入気」と「排気」の基礎的説明に代えたい。

坑内の空気が流通し汚れた空気を排出させるために作った風坑道。逆に坑内に新鮮な空気を入れる坑道を入気坑道という [笹尾 2012 : 50]

金子雨石『筑豊炭坑ことば』[1974 : 151] を元に、筆者が多くの元坑内労働者に教えてもらった知識も踏まえて補足するなら⁽⁴⁾、排気坑道の出口には扇風機が置かれ―通常の扇風機のイメージとは逆に―これが坑内の空気を吸い出すので、反対側の入気坑道から新鮮な外気が坑内に吸い込まれる。この空気は坑内の作業場をめぐりながらガスや炭塵・水蒸気などを伴って汚れた空気になり、最終的に排気坑道から排出される。坑内に入ってくる新鮮な外気が「入気」であり、逆に坑内をめぐって汚染された空気が「排気」と呼ばれる。

さて、大正中鶴炭鉱で仕繰りを担ったC氏の図1をよく見ると、図面右側の太い坑道から下に向かって「空気」、「入口」、「空気入り口」という文字と矢印が書きこまれている。すなわち、これは入気坑道である。一番下の坑道にも、やはり左右に向かう矢印と「空気」という文字が書かれ、左側の太い坑道には上向きの矢印と「出口」、「空気」という文字が書かれていて、排気坑道だと分かる。このように、C氏の図には坑道全体の空気の流れが描かれている。一方、三井山野炭鉱で掘進を担ったD氏による図2は、空気全体の流れを示してはいないものの、右の「オ一立坑」の字の左に下線を引いて「吸気口」の文字が、左の「オ二立坑」の字の左には煙が立ち上っていることを示すかのような複数の線が引かれ、「排気口」の文字が書かれている。このように、両者はともに「入気」と「排気」について記しているのである。

さらに、この図に言及しながら、両者がどのように自身の坑内労働経験を語ったのか、そのごく一部を切り取ってみよう。

C氏は、どのようにして炭鉱で働き始めたのかを図1を使って以下のように語る⁽⁵⁾。

C : 採炭やないで私は仕繰りをしたと。本線の仕繰り。15メートルのね、うん、あの一、切り上げ。あれが、盤膨れするんよ、坑内が「盤膨れ」ってずーっと膨れてね、狭くなるんよ穴が。それを切り上げよったと。ほいで、あの、汽車のレールがね、曲がったやつをこう、アーチして。そやけ、本線は、

(4) 筆者は、炭鉱に関する調査に着手し始めた2014年に栗田氏に初めて会った際、以上のような「入気」と「排気」、及びそれらを担う坑道の名称について詳細に説明してもらい、初めて「入気」と「排気」について知った。その後、2016年に筑豊の中規模炭鉱で電気技師を務めたE氏に出会うと、E氏からは炭鉱の採掘方法の変遷と共に、どのように空気の循環の仕組みが整えられてきたのかを、図1に似た図を何枚も用いて詳しく説明してもらった。第2節で述べた通り、筆者はもともと炭鉱をめぐる文化運動に関わる著述に親しんでおり、坑内空間の仕組みにまで関心が及んでいなかった。それゆえに、栗田氏やE氏が熱心に坑内の仕組みを説明してくれることに衝撃を受け、さらに別の元坑内労働者もこちらが質問する前から用意してくれていた図を用いてこの説明をしてくれるということに強く関心を持ったのである。ただし、E氏は電気技師であり技術職であることから、一般鉱員に比べてこうした図面にもともと親しみがあつたと考えられるので、全ての元坑内労働者の経験とその語りを同じ次元で解釈するのは不適切であろう。本稿で論じる研究課題は、むしろ、「炭坑の語り部」として活躍してきたE氏や栗田氏と同じような図を、炭鉱について公的に語る機会がなかったと思われるC氏・D氏のような人物も描き、筆者に同じ問題に関する説明をしてくれたということに興味をもって着想されたものである。

(5) 2018年9月2日に日炭高松炭鉱の元採炭夫・A氏の紹介で話を聞きに行った際の録音文字起こし。このため、上の引用箇所に続けてA氏がC氏の図を「よう描いたね」と誉めている声も録音に入っていた。〔 〕内は筆者注。＊は筆者の発言。以下同様。

もうー…棚こしらえな上へ、つかれんぐらいね。そやき、棚ーは、チェーンで棚を付けとってね、その棚の上に乗ってね、うちら作業しよったと。下はどんどん人車が、あ、あれが走るけ。石炭積んだ車が走るけね。危ないけ。それでしよったと。棚の上で。それが仕繰りやったと。そこが今言うね、〔ガサゴソ音がする＝図1を指し示している音〕。この入り口〔図1右上の坑口附近を示す〕。ここ、ここに、ここね、本線の仕事しよったと。ここはね、夏でもね、あのドンゴロスっちあるよね。あーのなんやかんや入れて外国から送ってくる。あのドンゴロスに真ん中穴ほがしてね。あれ着て仕事しよったと。中も…中も着てよ？中も当たり前に着てね。それでも寒いき。

*：寒い！？

C：うん。寒い！こっからねー、空気が入るんよ。ね？こうずーっと入ってね、こっから抜けるんよ。空気が。でここに大きな捲きがあってね、だ、もう、ファンがぶんぶんもうてね、坑内のあったかい空気をね、全部抜くんよ。それで、坑内で働きよう人は、あの一働けるんよ。坑内のもう、汚い、汚い、空気を、全部抜いてしまうんよ。そいで私たちが働きようその入り口からね、全部空気が入るけ、もう大風みたいのが入るん、風が。そこの上で仕事せないかんけね、夏でもドンゴロス着とかんと寒うて仕事ができん。冬なんかもう。いっぱい着てね、もう、毛のようなと着てね、

ここでC氏は、入気坑道の仕繰りを務めたことについて話す際、夏でもドンゴロス袋を着て仕事をするほど寒かったのだと話している。炭鉱と言えば暑い仕事と思いこんでいた筆者が、びっくりして「寒い！？」と聞き返すと、入気・排気と坑内の空気の循環について図1を用いて説明し、「夏でもドンゴロス着とかんと寒うて仕事ができん」かった理由を解説しているのである。

一方、1965年6月1日に、237人もの死亡者を出す大事故を起こした三井山野炭鉱の掘進夫だったD氏は、録音を取りながら話を聞き始めて10分ほどたったところで、図2を指し示しながら以下のように話している。

D：今度はここ〔図2の左上〕に、第二豎坑をまた掘ったんよ。そで、第二豎坑のこの、入り口のここ、一番高いとこね。ここね。高いとこ。でここに、扇風機をつけたと。うん、大きなとを。そでこれを、回して、そで坑内の中の空気を、全部こうーして、この中に、各作業所がこういっぱいあるやろ、坑内の中に石炭を通すためにね。斜めの坑道がいっぱいあるとよ。そこを全部こう通して、ここから排気。でここが吸入。こっから吸入、うーん空気を入れて、全体を回して、ここで排気しよったん。そやき一卸ちゅうて、この一、旧これの一坑道の、一卸、二卸ちゅうて、斜めに掘るとをね、一卸ちゅうところの、あれで、ガスの爆発があったんよ。

*：あ、働いてられた時…じゃなくて、

D：ううん…やないで、うん、あの働きよった時もやっぱ一卸や。そこがやっぱ一番あの一悪かったんよね。一卸のところでガス爆発あって、8人死んだろ？そやきもう、あの、あ、次に今度は200何ぼん時は、やっぱ一卸関係が、して。そで今言うごと、ここで、まあ仮に、〔爆発を〕したらもう、煙がずーーっと来てこん中通ってここさへ排気する。でここにおる人は全部、酸素がないき死んでしまう。

以上の部分に先立ってD氏は、自分が二番方で働いていた時に同じ箇所を担当していた一番方の人たちがガス爆発事故に遭って8人亡くなったことがあり、その後気持ち悪くなって辞職したのだと話していた。上の引用箇所では、D氏が「一卸で爆発があった」と言ったのに対して筆者がその爆発とはD氏の辞職のきっかけになった爆発であったのか、と尋ねている。それに対し、D氏は言われてみればその時も一卸だったし、1965年の大爆発事故の時もやはり一卸が関係していたのだと言い、そこは吸入口に近いので全体に煙が回って皆が死んでしまったのだと説明している。

さらに、採炭機械や棹取りと言った仕事を担当した経験を持ち、図3の模型を作成した栗田氏も、筆者に坑内について説明してくれた際、仮にキャップランプの明かりが消えてしまった場合は、風が吹いてくる方向に向かって行けばよいと教えてくれたことがある。採炭機械という職は、たった2人程で坑内のあちこちを移動

しなければならないという仕事であったという。このような職務を担う人々にとってこの知識は極めて重要であったと考えられる。

また、坑内の空気循環と坑内労働者の経験について考えさせられるものとして、中規模炭鉱の電気課職員であった槇野森氏が書き残した、短編小説「迷信と真実」がある〔槇野 2015〕。物語は、ある炭鉱のポンプ座で数年前に落盤事故で亡くなった女性の幽霊に、立て続けに2人のポンプ方が遭遇することから始まる。休日の夜、一人でポンプ座の番をしていると、「ヒュウン、ヒュウン」という音が聞こえてきて、女の幽霊が現れるのである。噂が広まり、欠勤者が続出して炭鉱の稼働に影響が出る程になったため、若い技師たちが真相を確かめに行くことになる。その結果、「運搬坑道・別名入気坑道・から排気坑道に通じている通路で、目抜きと呼ばれ風門が三カ所から四カ所取り付けられ、人道用で作業場に行く通路又非常時の通路でもある」〔槇野 2015: 27〕、と説明される「目抜き坑道」とポンプ座の間に岩のすき間ができ、そこに風が通って笛のような原理で音が鳴っていたのが原因だと突き止められた、という話である。

槇野氏は、2008年に田川市石炭・歴史博物館で開催された館長講座「炭坑の語り部」で、「保安と事故」というタイトルで講演を行い、自身が勤めていた田川郡の上田鉱業上清炭坑で1961年3月9日に起きた坑内火災事故（71名死亡）と、その後の原因究明調査の経過についても講演している〔田川市石炭・歴史博物館編 2010: 64-72〕。この中で、槇野氏は「上清炭坑坑内図面」を配布資料として示しながら〔田川市石炭・歴史博物館 2010: 66〕、調査の過程で、上清炭坑で目抜き坑道の1本を完全に封鎖していたことが違反行為に当たる可能性があるとの指摘がなされたものの、結局これによって死者が増えたとはまでは立証できなかったという経緯について詳細に説明している。槇野氏はここで、1958年に同炭坑でメタンガス爆発事故が起きた後、保安対策のためにこの目抜き坑道に針金で扉を括りつけて封鎖をしたのは自分であったとも話している。こうした目抜き坑道とそこを通り抜ける風にまつわる忘れがたい体験が、槇野氏をして「迷信と真実」という小説を書かせたのかもしれないと思わせられる。

5 結論に代えて—今後の課題と展望—

（元）炭鉱労働者に会って話を聞いたことがある人にとって、本稿で紹介したような図面や、坑内に関する基礎事項としてまず入気と排気の説明がなされることは、ありふれた出来事に過ぎないかもしれない。また、炭鉱に関わる研究者にとって、このような図を用いること、入気・排気について説明を行うことの必要性は、自明の理かもしれない。しかし、筆者はこれらの事例をさらに深く分析することで、筑豊の炭鉱労働者たちの労働現場における空間認識のありように、よりつぶさに迫り得ると考えている。戦後の筑豊で現場鉱員として雇用された人々は、入社時に自身の労働現場について座学的な教育を受けた経験はないと語り、それにもかかわらず、炭鉱を全く知らない世代である筆者のような研究者の来訪に際して、同様の図を用意し、同じような説明を行った。彼らが労働者として身につけてきた空間認識が、その経験を「語り継ぐ」際にも動員されるのである。本稿で紹介した事例から、入気・排気は、「風」として身体感覚的に、触覚や聴覚を通して常に坑内労働者たちに知覚されていたものだということが分かる。そして、入気・排気は坑内労働者たちが生きるための酸素を運ぶと共に、危険なメタンガス等の人々に死をもたらす気体も運んでいた。だからこそ、入気と排気は坑内労働者にとって不可欠な基礎知識だった。すなわち、筆者は元坑内労働者に対する聞き書きの場で、まず坑内で安全に生き残るために必要な知識を教えていただいていたことになるとすら言える。筆者に語ってくれた元坑内労働者たちは、殊更に「命がけで働いた」「自分たちの仕事は死と隣り合わせだった」などと言うことはなかったが、このような坑内労働についての体験に基づく語りを詳細に分析することで、彼らの労働現場である坑内空間に対する認識の中に、自分や他者の命の安全を守る知恵が織り込まれていたことを明らかにできている。それは、炭鉱を語り継ぐ必要を感じている現代の筑豊リバイバリストを含めた多様な地域住民にも、有益なものとなるだろう。

さらに、炭鉱を通してこのような考察を深めることは、筆者が属してきた文化人類学や民俗学に対しても、有益な示唆を与え得ると考える。日本の民俗学研究の知見は、現代的な産業にも関心を向けるようになったとはいえ、やはり未だ生命を持つ自然と関わる農業や漁業などに偏っている。一方、坑内の自然は、命ある動物

や植物のライフサイクルとは異なる、人間にとってより不確実性の高いライフサイクルとリズムを持っている。筆者がこれまで聞き書きをしてきた坑内労働者にとって、こうした坑内の自然の不確実性と、ちょっとした欠損や同僚の操作ミスなどによって大事故をもたらす炭鉱の機械機構の不確実性の間には、どのような質的差異があったのかという点は、さらに詳細な分析を要すると考える。例えば扇風機が引き起こす坑内風を感じながら労働していた筑豊の坑内労働者にとって、自然とより人工的な装置のもたらす影響とは、ひょっとするとかかなり曖昧なものだったのではないかとも思われるからだ。筑豊で炭鉱を語り継ぐ人びとの中には、機械化されていない小ヤマの労働にのみ人間らしさを見て、機械化以後の労働をより人間味の失われたものと見なす向きもある。しかし、機械機構と自然の絡み合う労働現場で築かれた労働者自身の経験知の中には、装置も（時として装置を介して初めて認識される）自然も自分たちの立ち居振る舞いを規定する所与のものとして生きる、現代の私たちの生き方につながるヒントがあるのではないだろうか⁽⁶⁾。坑内労働者たちの語る経験をどのようなものとして受け取り語り直していくべきかをさらに探求していくことで、将来的にはこのような大きな視野を持つことも可能になるのではないかと考えている。

参考文献

- Allen, Matthew 1994 *Undermining the Japanese Miracle: Work and Conflict in a Coalmining Community*, Cambridge University Press.
- 井上博登 2010a 「炭鉱社会像の多様性へむけて：「軍艦島」におけるヤサイブネとアキナイ」『現代民俗学研究』2：81-90.
- 井上博登 2010b 「端島炭鉱「軍艦島」の生活」『社会情報』19(2)：211-217.
- 金子雨石 1974 『筑豊炭坑ことば』名著出版.
- 川松あかり 2019 「上野英信の記録文学成立過程と民俗学：「くただ中で」書く／生み出す」という方法」柳田国男研究会編『柳田国男研究8 柳田国男以後・民俗学の再生に向けて：アカデミズムと野の学の緊張』pp.272-319、梟社.
- 川松あかり 2021 「炭鉱犠牲者の供養と日・韓・朝の友好：日本の旧産炭地筑豊における住民実践を事例に」『日常と文化』9：97-116.
- 鞍手町歴史民俗博物館 2024 「令和7年オープン予定 石炭資料展示室」『ふるさと鞍手』(58)：4-6
- クリフォード、ジェイムズ・マークス、ジョージ 1996 『文化を書く』春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子訳、紀伊國屋書店.
- 笹尾了祐 2012 『思い出の炭鉱ことば：筑豊の炭鉱用語集』今心.
- Schmidt-Lauber, Brigitta 2012 “Seeing, Hearing, Feeling, Writing: Approaches and Methods from the Perspective of Ethnological Analysis of the Present”, in Regina F. Bendix, and Galit Hasan-Rokem (eds.), *A Companion to Folklore*, pp.559-578, Wiley-Blackwell.
- 清水拓 2022 「日本石炭産業の技術的到達点における生産職場の研究 — 1990年代の太平洋炭鉱の採炭現場を事例として—」早稲田大学博士論文.
- 高橋正雄 1962 『変わりゆく筑豊：石炭問題の解明』光文館.
- 田川市石炭・歴史博物館編 2010 『田川市石炭・歴史博物館館長講座記録集1 炭坑の語り部Ⅰ：平成20年度「炭坑の語り部」の記録』田川市石炭・歴史博物館.
- 福岡県田川市総務部総合政策課編 「筑豊炭田を探る」『広報たがわ』1296：2-7.
- 榎野森 2015 「迷信と真実」『文芸山口』(320)：21-28.
- マリノフスキ、プロニスワフ 2010 『西大西洋の遠洋航海者』増田義郎訳、講談社.
- レーマン、アルブレヒト 2020 「民俗学の方法としての意識分析」及川祥平訳、岩本通弥編『方法としての〈語り〉：民俗学をこえて』pp.41-67、ミネルヴァ書房.

ウェブサイト

- 田川市立図書館「田川の歴史・地図等 解説」『田川市立図書館／筑豊・田川デジタルアーカイブ』<https://adeac.jp/tagawa-lib/text-list/d100010/ht000010> (2024/12/11 閲覧)

(6) このような自然と人間、そして装置という三項を対比的に置いて坑内労働を分析する視点は、清水 [2022] に拠っている。閉山が早く、機械化の進展にも炭鉱ごとにはらつきが大きい筑豊の坑内労働者の空間認識を問う場合、この三者の立ち現れ方が坑内労働者の認識においてより混然一体となっているさまを見出し得るのではないかと考えている。